

# 小・中9年間で考える音楽科教育

- より感動のある音楽の授業をめざして -

音楽科研究会議

草野 ひろ子<sup>1</sup>

相田 益美<sup>2</sup>

富永 美栄子<sup>3</sup>

千葉 葉子<sup>4</sup>

## 要 約

カラオケやCD・MDの普及など、現在の子どもたちは個人の好みに応じて音楽を楽しめる環境にあるが、それだけでは音楽のもつ価値を十分味わうことにはならない。子どもたちにとって、学校において仲間と音楽を味わい共に音楽をつくる喜びや感動を体験することは、とても重要な過程と考える。しかし、授業時数が縮減された中でも小学校と中学校が互いを十分に理解できていないために、大切な授業が有効に実施されていない現実もある。本研究会議では、音楽の授業における小・中連携として教師が各校種別の学習内容や授業実態を知ることにより、子どもの学びに連続性が生まれ、さらに学習が深まると考え「学習指導要領の比較」「意識調査」の方法から、小・中のつながりや違いを探ることにした。

「学習指導要領の比較」においては、基本的に同じねらいでつながっているが、表記の仕方や内容に違いが見られ、小・中の教師が互いに双方の内容をきちんと理解する必要が見られた。「意識調査」において、小・中の教師がめざしているものは同じであるが、授業方法や領域ごとにかかる時間のバランスに違いがあり、あまり系統性がとられていなかったことがはっきりとした。それらの分析や調査から、まず、小・中の授業の内容や方法を伝え合い、それぞれのよさを浮き彫りにしていった。そのよさを授業の中にどのように取り入れていったらよいかを、この研究会議では歌唱における小・中のつながりに焦点を当て、研究を進めることとした。話し合いの中から、「授業実践」では、「より感動のある授業」をめざすために小・中学校それぞれのよさを学習方法に取り入れ、感受と技能が結びついた授業を行った。その結果、学習に対して意欲的に取り組んだり学習内容に対して深く考えたりする子どもたちの姿が多く見られ、小・中学校の教師が互いに深く理解することの重要性を確認することができた。

キーワード：小・中連携、違い、つながり、教師の理解

## 目 次

主題設定の理由	66	(1)学習指導要領のつながりを探る	69
1 現在の音楽環境と音楽科教育	66	(2)意識調査の実施	72
2 学校現場では	67	(3)授業実践	76
3 研究のねらい	67	研究のまとめと今後の課題	79
研究の内容	68	参考文献	80
1 研究の方法	68	指導助言者	80
2 研究の実践	69		

<sup>1</sup>川崎市立長沢中学校教諭（長期研修員）

<sup>2</sup>川崎市立下河原小学校教諭（研修員）

<sup>3</sup>川崎市立下小田中小学校教諭（研修員）

<sup>4</sup>川崎市立南菅中学校教諭（研修員）

## 主題設定の理由

### 1 現在の音楽環境と音楽科教育

時代の流れとともに、現在の子どもたちを取り巻く音楽の環境は日々変化を遂げている。もはや当たり前となったカラオケ文化を始め、CDやMD、そしてデジタルミュージックプレーヤーと、個人の好みに応じて音楽を楽しめる世の中となっている。インターネット等を通じて様々な音楽を聴いたり調べたりすることもできる。現在の子どもたちの周りには、音楽があふれているようにも感じる。しかし、一步離れてこの状況を見つめ直したとき、子どもたちを取り巻くこの音楽環境は、子どもたちの成長に必要な要素を十分に満たしているといえるのだろうか。好みの音楽を楽しむことだけが音楽の存在価値ではないという気がしてならない。

キース・スワニックは「音楽は、人間という種族の歴史と同じくらいに古い歴史を持つ対話の様式であり、自分自身や他の人々に関する考え方を、鳴り響く形式の中で明確に表現する手段である。(中略)音楽の価値は、全ての対話の形式と共有しているものであり、それぞれの個人とそれぞれの文化の間に存在している空間を明確にしていきながら、その空間を満たしていく役割を果たしているところに存在している。」<sup>1)</sup>と述べている。つまり、自分自身や他者との対話の中に音楽の価値があると言っているのである。ところで、冒頭に述べた音楽機器等によって、子どもたちはどのくらいこの対話を行っているのだろうか。スイッチ一つで再生することも止めることもでき、個人の興味を追求できるよさがある反面、気分しだいですぐにやめることもできる。

精神的に成熟した大人であれば、この音楽機器等でも十分な対話は可能と思われる。しかし、精神発達段階の途中にある子どもたちにおいては、自分の気分や好みだけを最優先させる一方通行的な対話となってしまう場合が多いのではないだろうか。なぜなら、途中で止めようが音楽機器は何も言わないからである。授業の中においても、知らない音楽や理解しにくい音楽を困難と感じた場合に、自分一人では音楽に向き合おうとしない子どもたちに多く出会ってきた。そのような子どもたちが一人で十分な音楽の対話を行っているとは考えにくい。様々な音楽機器によって便利になった音楽環境を十分な音楽環境と錯覚し、音楽機器の普及だけで音楽の土壌が整っていると考えるのは危険である。それだけでは、子どもたちは音楽のもつ価値の一部しか味わったことにならないからである。

学校という集団の場で音楽を学習することは、同年代の子どもたちと一緒に音楽における対話を実現させていくことである。個人の好みだけではない、集団という様々な考えが混在する中で、音楽のもつ美しさ・豊かさ・面白さといった音楽のよさを感じ取ったり、歌や楽器等を用いて表現する楽しさを味わったり、仲間と音楽をつくる喜びや感動を味わったりすることは、子どもたちの成長のために必要な体験である。

子どもたちは音楽自体がもつ調和による美しさを求めていく中で、自分以外の価値観を知ったり、集団の中の自分を知ったりしながら、他とのかかわりの中で自分を生かす方法を学んでいく。そして、表現をつくり上げるという一つの目標に向かって、子どもたちは仲間との一体感を味わい、集団における自分の存在価値を見いだしていく。これらの体験は、私たち音楽科教師の願い[生涯にわたって音楽を愛好していく心情]とともに、現在学校教育がめざしている[生きる力]の基盤となっていくものである。これは学校という集団の場における音楽科教育だからこそ、育成できるものなのであり、ピアノ教室といったような一般に行われている演奏技術を習得することを目的とした音楽教育とは大

<sup>1)</sup> キース・スワニック「音楽の教え方」音楽之友社 2004年 P.21, 55

大きく異なる点である。

しかし、平成 14 年度より完全実施された学校 5 日制に伴い、小・中 9 年間の義務教育での音楽の授業時数は 120 時間の縮減となった。しかし、縮減となった今日においても、音楽科教育の意義は変わるものではない。このような環境の中においても、音楽科には 1 分 1 秒を貴重な時間として授業を行うことが求められている。

## 2 学校現場では

限られた授業の中で、子どもたちにとって価値のある音楽活動を行うために、私たち音楽科教師は題材構成の工夫・教材の厳選・実技指導の方法等を、試行錯誤しながら懸命に授業に取り組んできた。しかし、それにもかかわらず困難な現象が起きている。例えば、現在、中学校では 3 学年間を通じて 1 種類以上の和楽器を用いることになっている。A 中学校で箏の取組を計画し、「さくらさくら」を題材を選んで授業を行ったところ、生徒たちは「またか。」という反応をした。理由を聞いてみると、B 小学校でも日本の音楽に親しむ活動として箏による教材「さくらさくら」の体験学習をしていたのである。また、最近は中学校で歌われている合唱曲が、小学校でも同声二部合唱や同声三部合唱に編曲されて歌われることが多くなっている。中学校側では全く初めて出会う曲として計画していたものが、実はもうすでに馴染みのある曲だったということも少なくない。

ここでは同じ題材や教材を使うことを問題にしているのではない。同じ題材や教材を扱った場合でも、学年が変わればねらいも変わることから、十分に学年に応じた学習をすることができる。しかしこの場合、中学校が小学校での学習内容を把握できていなかったために起きた学習内容の重複が問題なのである。授業時間の縮減によりこれまで以上に大切に扱ってきたはずの時間が、思いもかけないところで無駄になっているのである。また、このようなことによって、子どもたちの意欲を半減させてしまう可能性があるという現実にも目を向けなければならない。

## 3 研究のねらい

本研究会議の中では、小・中学校の授業の実態について多く話し合った。話し合いを進める中で、同じ義務教育でありながら互いの授業実態を知る機会が少なく、ましてや小・中学校を貫く系統的な指導の在り方や課題については、これまでほとんど触れられていなかったことを実感した。このままでは音楽の授業における小・中学校の理解が、互いにできない現状は変わることがない。

そこで本研究会議では、まず小・中学校の教師が互いの学習内容や授業実態を知ることによって、子どもたちにとってより深い学びのある授業につながり、音楽による喜びや感動を味わうことができるのではないかと考え、研究主題を次のように設定した。

研究主題

# 小・中 9 年間で考える音楽科教育

- より感動のある音楽の授業をめざして -

# 研究の内容

## 1 研究の方法

授業の進め方や学習内容の理解について、小・中学校の子どもと教師の関係を考えると、図1のような構造になると考えられ、「知らない。」「理解できていない。」を表す太い矢印が目立つ。本研究会議では、授業を行っている教師側の3本の太い矢印に注目した。これらの矢印を機能させることによって、小学校と中学校の指導における様々な『違い』や『課題』に気づき、互いが学習内容のつながりや子どもの発達段階、教材の関連性を意識した指導の工夫を行うことができれば、さらに学習が深まり感動のある音楽の授業を生み出すことができるのではないかと考えたからである。そして、図2の研究構想図に基づき、小・中における学びに連続性をもたせるためには、小・中学校の教師の理解が必要であると考え、その理解を深めるため次のように研究を進めることとした。

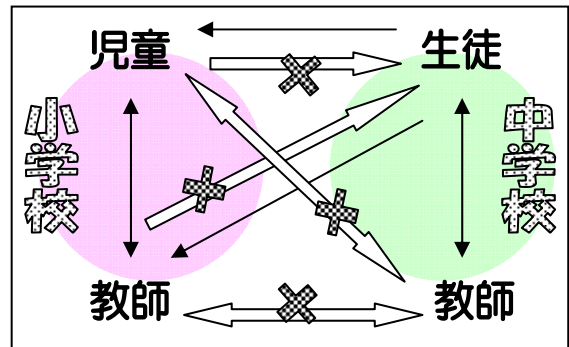


図1 授業に関する子どもと教師の理解関係

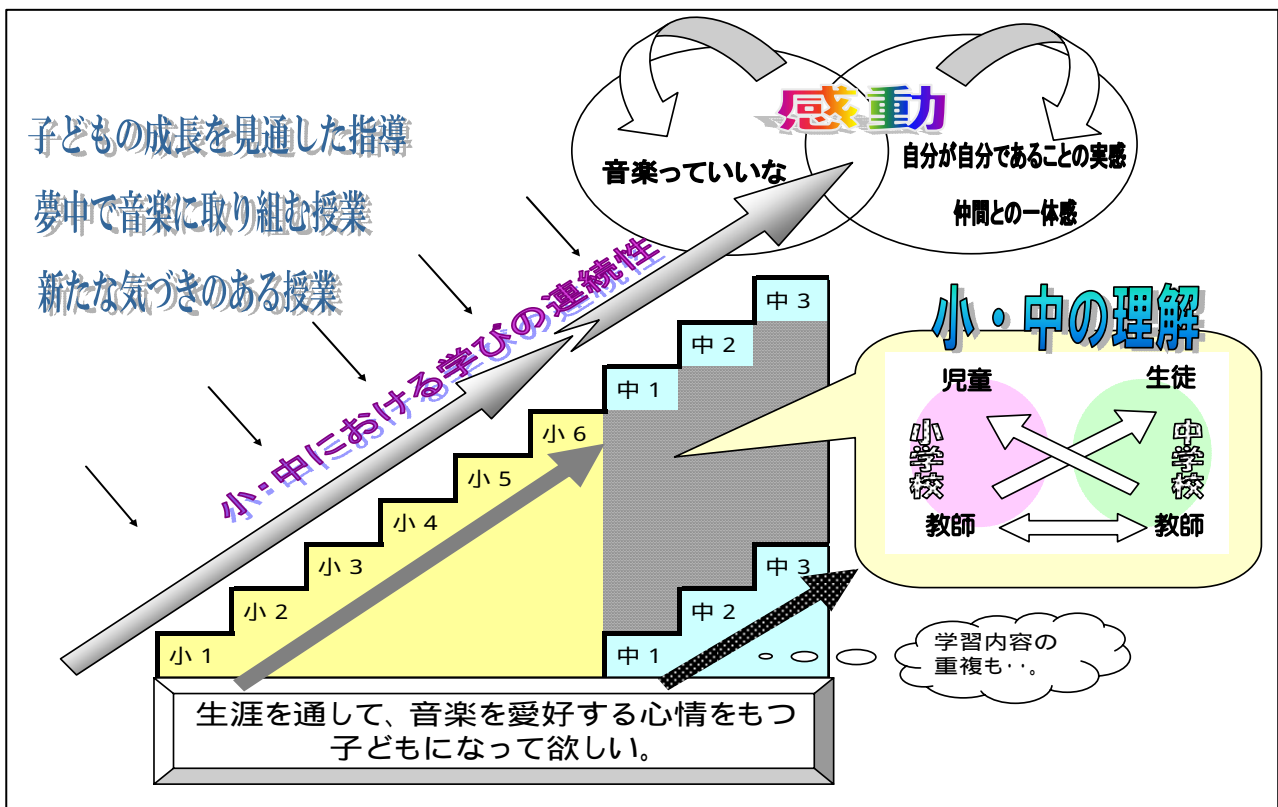


図2 研究構想図

### (1) 小・中学校の学習内容の系統性を探る

学習指導要領の内容を比較することで、系統性やつながりにくい部分を探る。

### (2) 子どもたちと教師の意識を明らかにするための意識調査を実施

音楽の授業に対する教師と子どもたちの意識の違いを明らかにする。

### (3) 授業実践を通して小・中学校の違いやつながりを探る

本研究会議の研修員による歌唱の授業実践を通して、小・中の違いやつながりを探る。

- ・小学校 5 年生
- ・中学校 2 年生

## 2 研究の実践

### (1) 学習指導要領のつながりを探る

学校の授業でどのような内容を学習するのかを明記しているのは、学習指導要領である。小・中どちらの学習指導要領も簡単に入手することはできるが、実際の現場では自分がかかわっている学年の内容を確認するのが精一杯である。本研究会議の中でも、他校種の学習指導要領をきちんと読んだという研修員はいなかった。図3は、平成17年9月に、本研究会議が川崎の小・中学校において音楽の教科を担当している教師249名を対象に行った意識調査結果の一部である。

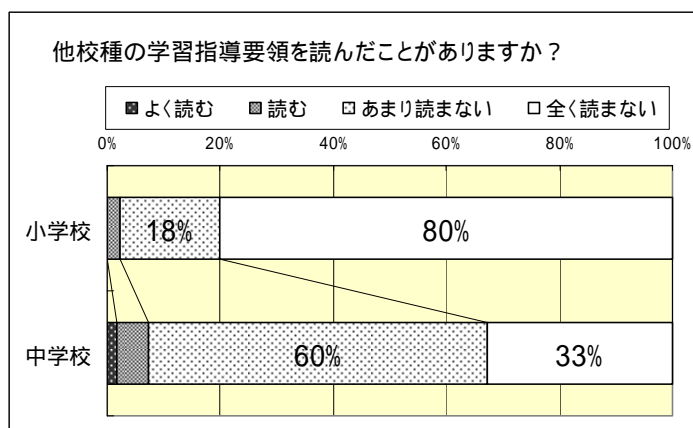


図3 小・中教師の意識調査 H17.9 実施

小・中学校のどちらの教師も、9割以上が「あまり読まない」「全く読まない」と答えている。小学校では基本的に学級担任制であり、多岐にわたる教科を中学校の学習指導要領と一つ一つ照らし合わせることが容易でないということは容易に想像できる。中学校においても一部参考程度に見ることはあっても、じっくり確認するまで読むには至らないというのが現状のようである。

小・中どちらの現場においても、なかなか全体を通して確認する余裕がないのが実状だが、子どもたちは確実に小学校から中学校へと学びの場を変え学習を続けている。本研究会議では、小・中を見通して授業を考えるために学習指導要領におけるつながりや課題を見つけることは、子どもたちのよりよい学びに有効であると判断し、つながりや課題を見つけることにした。

学習指導要領に示されている音楽科の内容の5つのまとまりに共通する文言をポイントとしてまとめていくことで、学習内容の発展や違いがわかりやすくなるのではないかと考え、フローチャート式の図で表した。

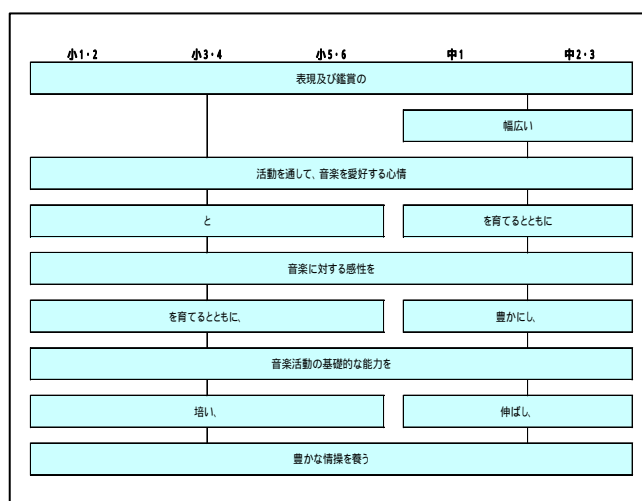


図4 第1目標

基本的に小・中は同じねらいでつながっている

学習指導要領に示されている目標を比較してみると、5つの共通部分が見られる(図4)。

まず、音楽活動を通して目標を実現させるために、どちらも学習活動の基盤を「表現及び鑑賞の活動を通して」としている。そして、明るく豊かに生きるための「音楽を愛好する心情を育てる」こと、

教科の特性にかかわる「音楽に対する感性を育てる」こと、「音楽活動の基礎的な能力を育てる」ことの3つの共通のねらいを通して、最終的に人間形成をめざす「豊かな情操を養う」ことを本旨として、基本的に同じねらいでつながっていることがわかる。

つながりを意識したときに生まれる課題

ここで、9年間のつながりを意識して考えたときに、「幅広い」「豊かにし」「培い」「伸ばし」をどのようにとらえるかが課題になってくる。

「幅広い」は、「表現及び鑑賞の活動」に対して中学校に加えられている文言である。この部分の学習指導要領解説をまとめると次のようになる。

「幅広い」

小 学 校	<p>表現と鑑賞の多様な活動を通して学習すること。</p> <p>児童の音楽活動は歌唱・器楽・創作・身体表現・鑑賞など、多様な音楽を幅広く体験すること。</p> <p>指導内容を単なる知識や技能の機械的訓練にとらわれず、児童の感性を豊かに働かせながら、楽しい音楽活動を展開させること。</p> <p>児童の思いや願いを実現する音楽活動の中で音楽の諸能力が身に付く学習活動を引き出すこと。</p>
中 学 校	<p>生徒が楽しく音楽とかかわるために、個性や、興味・関心を生かした、多様な音楽活動を展開すること。</p> <p>我が国や世界の古典から現代までの作品、郷土の伝統音楽や世界の諸民族の音楽など、多様な音楽を教材として扱うこと。</p> <p>音楽の素材にも関心をもたせること。</p>

注目すべき点は二つある。一つは、小学校においても「幅広く」という文言を用いていることであり、もう一つは、「幅広く」ととらえる分野が異なっているということである。小学校では、歌唱・器楽といった幅広い活動について述べているが、中学校では歴史的・世界文化的な視野での教材や素材についての幅広さを述べている。小学校で「幅広い音楽活動」を体験した子どもたちが、中学校において、「幅広い教材内容の音楽活動」を行っていくつながりが見えてくる。しかし、片方の学習指導要領解説しか確認していない場合、このつながりは見えにくい。同様に「豊かにし」は、小学校の「音楽に対する感性を育てるとともに」に対して、中学校では「音楽に対する感性を豊かにし」と示されており、「音楽に対する感性」が共通し、「培い」「伸ばし」は「音楽活動の基礎的な能力」が共通している。これらのことばが接続している共通の文言について、解説を比較してみると次のようになる。

「音楽に対する感性」

小 学 校	<p>音楽的刺激に対する反応</p> <p>・音楽的感受性。具体的には、リズム感、旋律感、和声感、強弱感、速度感、音色感など、感覚的に受容される音楽の諸要素に関する刺激に対して、音楽的に反応するなど、表現や鑑賞の活動の根底にかかわるもの。</p>
中 学 校	<p>音楽の豊かさや美しさを感じ取らせる経験を通して、音や音楽を知覚すること</p> <p>・感じ取らせるばかりではなく、音楽から豊かさや美しさを見つけ出したり、それを表現するための工夫を重ねたりすること。</p>

この表で比較してみてもわかるように、解説には違いが見られる。小学校が具体的な感性の内容につ

いて述べているのに対して、中学校では感性を育てる方法に焦点が当てられている。この部分についても両方の内容を理解していれば問題はないが、片方だけでは一貫した視点はもちにくく、小学校と中学校の授業の内容に影響が出てくると考えられる。特に中学校では「音楽の美しさや豊かさ」について、音楽のどの要素によって感じるができるのかを教師がきちんと理解し、子どもたちに「音楽の美しさや豊かさ」の具体的な価値づけをして戻していくことが、小学校からの学習をきちんと積み重ねていく鍵となるのではないだろうか。

「音楽活動の基礎的な能力」

小学校	表現や鑑賞の活動に必要なとなる音楽的な諸能力のこと ・具体的には、児童が感じたことや心に描いた思いを、自ら声や楽器で表現して伝えたり、演奏のよさや音楽の美しさを感じ取りながら、主体的に聴いたりすることができる能力。
中学校	生涯にわたって楽しく充実した音楽活動ができるための、基になる能力 ・構成要素（音色、リズム、旋律、和声を含む音と音とのかわり合い、形式など）と表現要素（速度、強弱など）による構造的側面を知覚し、感性的側面（雰囲気、曲想、美しさ、豊かさなど）をイメージをもって感じ取る能力。音楽を形作っている諸要素を感受する能力。

「音楽活動の基礎的な能力」の解説についても、内容や表記の違いが見られた。小学校では、授業での音楽活動における現段階の能力が述べられ、中学校では、生涯を見通して必要な能力が述べられ

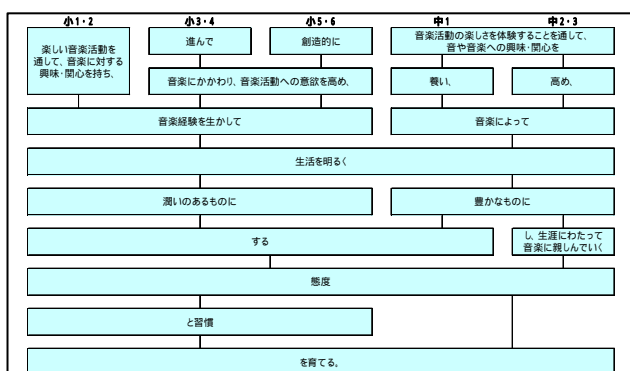


図5 各学年の目標（1）

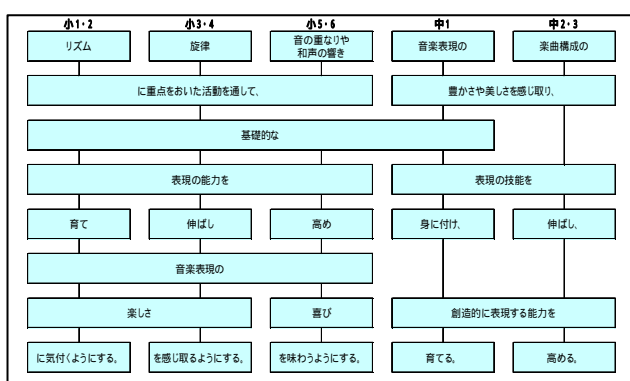


図6 各学年の目標（2）

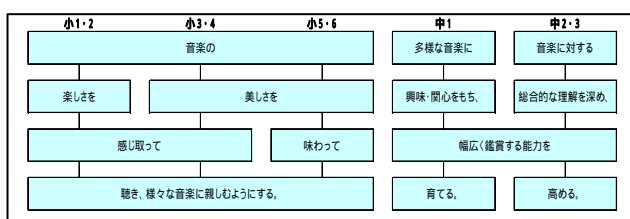


図7 各学年の目標（3）

ている。このことについても、両方の内容をきちんと理解していなければ、小学校や中学校の内容だけを理解した教師の「音楽活動の基礎的な能力」のとらえが食い違ってしまう可能性がある。

次に「各学年の目標」について考えていく。「各学年の目標」は、次の観点に基づく3項目で構成されている。

- (1) 音楽活動に対する興味・関心、意欲を高め、音楽を生活に生かそうとする態度、習慣を育てること。
- (2) 表現の能力を育てること。
- (3) 鑑賞の能力を育てること。

これらを「第1目標」と同じようにまとめ、図5～7に表した。

全学年を一覧の表にしてみると、小学校第5学年及び第6学年と中学校第1学年の間に溝が浮かび上がっているように見える。

これらの違いの原因の一つとして考えられるのは、子どもの発達段階の違いである。心や体の発達段階が異なれば、学習内容や学習方法も異なることは不思議ではない。

しかし一方では、小学校学習指導要領と中学

校学習指導要領で表記において、統一が図られていないのではないかと考えられる部分もある。特に(2)については、同じことばが使われていても解釈が難しい(図6)。小学校や中学校の中ではそれぞれ継続性や発展性があるのだが、小学校と中学校のつながりで考えると、様々な場面で何をつながりととらえるのか判断しにくい箇所が出ている。(3)は表記の方法が違っているため、片方の学習指導要領を見ただけで、もう一方の内容を予想することは難しい(図7)。この現象は「2内容 A表現 B鑑賞」「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」においては一層顕著に見られる。

同じねらいをめざして

以上のことから、学習指導要領上の表記の違いはあっても、小学校も中学校も音楽科教育としてめざすところは基本的に同じであるということがうかがえた。

学習指導要領のつながりを考えていく中で見えてきたことは、一人の子どもを9年間で育てていくことを前提として、小学校と中学校の枠を越えて大きな視野から授業を考える必要があるということである。なぜならば、目の前にいる子どもたちには確実に過去の音楽体験をもとに、今学んでいる音楽が未来での音楽体験につながったり広がったりしていくからである。一見、溝のように思える内容の違いについても、教師が大きなねらいを念頭に入れながら、つながりを見つけていくことで、子どもたちにとってよりよい授業を考えていくことになるのではないかと考える。

## (2) 意識調査の実施

「小学校と中学校が互いに理解をして授業を行うことは大切である。」ということを否定する教師はそう多くはないはずであるが、実際にはどのくらい理解できているのであろうか。本研究会議でも、小・中の連携や相互理解の必要性を感じていたのにもかかわらず、話し合いはなかなか進まなかった。これは、互いの学習内容をあまりにも知らないことが多かったからである。

「へえ、そうなの。知らなかった。」

「え～、全然違うね。」

「え、待って。 についてはどうしているの？」

このようなやり取りが何度も繰り返された。

小学校の教師が中学校のことを、中学校の教師が小学校のことを知らないことはたくさんあった。例えば、教科書一つとっても、小学校の教師が中学校の教科書を、中学校の教師が小学校の教科書をほとんど見たことがなく、全く知らない曲があるのはもちろん、同じ曲が扱われていたり、同じ曲でも歌詞が違っていたりしていることに初めて気づいたところがある。また、授業の進め方についても違いが多く見られた。パートの決定方法では、時間がかかっても子どもが選ぶことを優先する小学校と、手際よく振り分けて演奏する時間を優先する中学校とでは、互いの大事にしているものが何なのかを理解するために、かなりの時間がかかった。

このように小さな研究会議の中においても知らないことが多くあった。そこで、小・中連携した音楽科教育を考えるためには、この問題を川崎全体ではどのようにとらえているのかを把握する必要性を感じ、小・中学校の教師や子どもたちが音楽の授業をどうとらえ、何を願っているのか等を調査することにした。

対 象	小学校の音楽の授業を担当している教師 (194名)	
	中学校音楽科教師 (55名)	
	小学校3年生 (330名)	6年生 (327名)
	中学校1年生 (327名)	3年生 (311名)



実施期間 平成 17 年 9 月

内 容 教師用アンケート（10 項目）

子ども用アンケート（全学年共通：7 項目）

学年別： 小 6（2 項目）中 1（4 項目）中 3（4 項目）

### 意識調査結果

#### 大きな違いは専門性

集計結果からは、小学校のおよそ 9 割の教師が専門外と答えていることがわかる（図 8）。基本的に小学校では担任が全教科を指導しているため、当然の結果とも考えられる。すべての小学校の教師が音楽を得意としている訳ではなく、専門的な勉強をしてきた中学校教師と授業が違ってくるのは、むしろ当然のことと考えられる。

#### 教師がめざしているものは同じ

教師の専門性の有無が、実際の授業ではどのように違いとして現れているのであろうか。まず、本研究会議では小・中において授業で大切にしていることが違うのではないかと考えた。しかし、実際の調査結果からは、小学校では音楽を愛好する気持ちを、中学校では技術の向上をめざしているのではないかという本研究会議の予想とは異なり、小・中のどちらとも音楽を愛好する気持ちを育てていくことを 1 番に考えている教師が多いことがうかがえた（図 9）。つまり、小・中どちらの教師も、めざしているものは同じであることがわかった。

#### 違いを感じるものは何か

しかし、小・中共に教師は互いの授業に違いがあると感じており、意識調査でも授業方法や技能指導等が違いとして挙げられている（図 10）。

本研究会議でも、授業の違いについて、課題のもたせ方・発声練習・音取りの方法等、様々な違いが話題に挙がり、意見交換を進めた。そして小・中の違いについては、発達段階の違いだけでなく、互いの授業に対する違和感として考えている部分があ

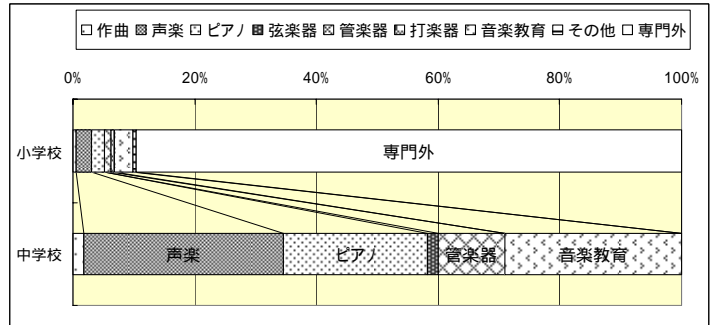
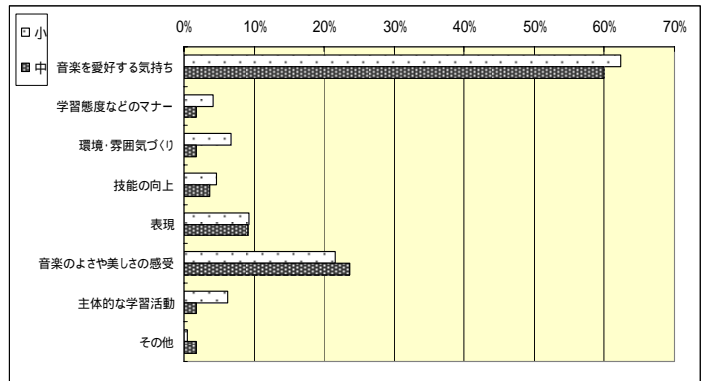
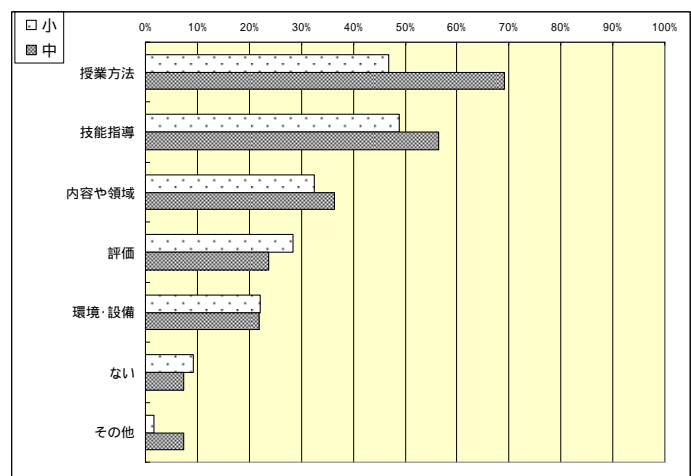


図 8 教師の専門性



その他 (小) 楽しさ (中) アと共に主体的・意欲的に音楽を奏でようとする気持ち

図 9 教師：授業で大事にしていること



その他 (小) 教師の専門性の高さからくる指導の違い (小) 年齢・経験を通して専門性が出てくる (小) 専門の教員が指導している (中) 楽典など基礎知識を全くやらないまま合唱合奏に取り組んだり、やるべきことの順序が違っていると思う (中) より生徒の主体性を生かす授業展開 (中) 見ていないので分かりません

図 10 教師：授業の違い（複数回答可）

ということもうかがえた。

課題の持ち方を例に挙げると、小学校では子どもに考えさせ、自ら課題をもつことを大切にしている。それに対して中学校では、教師がある程度課題を示し、全体の中でその課題を解決するように授業が進んでいく。小学校の教師は、中学校の方法では課題をもったことにならないと考えているし、中学校の教師は、課題づくりに時間をかけるより、実際に音楽を表現する時間を多くもつことを大切にしている。「課題をもつ」ということ一つをとっても、小学校と中学校の認識は大きく違っていることが実感できた。

別の角度から見ると、送り出す側と受け入れる側の違いも出ている。中学校（小学校）で育てて欲しいことの意識調査では、小学校教師が「豊かな表現力」や「音楽のよさを感じ取る力」を育てて欲しいと考えているのに対して、中学校教師の約5割が「マナー」や「基礎技能」を育てて欲しいと考えている（図11）。「マナー」については忘れ物や音楽室でのルール等、教師によって対応に違いが生じる分野ではある。しかし、中学校の限られた時間で、マナーを1から指導しているのでは、肝心の音楽活動の時間が削られる危惧があるため、切実な問題ととらえているものと考えられる。

次に、領域の取組についての意識調査では、歌唱と器楽の領域にはっきりと小・中の違いが出ている。（図12）

「どうして中学校では小学校みたいに、たくさん楽器を使って合奏しないの。」

「中学校は合唱がとても多いよ。」

実際にこのような子どもの感想を、本研究会議の研修員も耳にしている。子どもの感想を裏づけるように、中学校は歌唱領域をメインに授業が展開していることがわかる。この扱いの違いは川崎市の音楽の授業における小学校と中学校の違いでもあり、特徴でもあると考えられる。

では、小学校と中学校での歌唱や器楽の扱いが異なる理由はどこにあるのか。また、中学校では歌唱に力を入れていることや器楽をあまり扱っていない現状を子どもたちはどのように受け止めているのであろうか。子どもたちの意識調査の結果の視点から考えていくことにした。

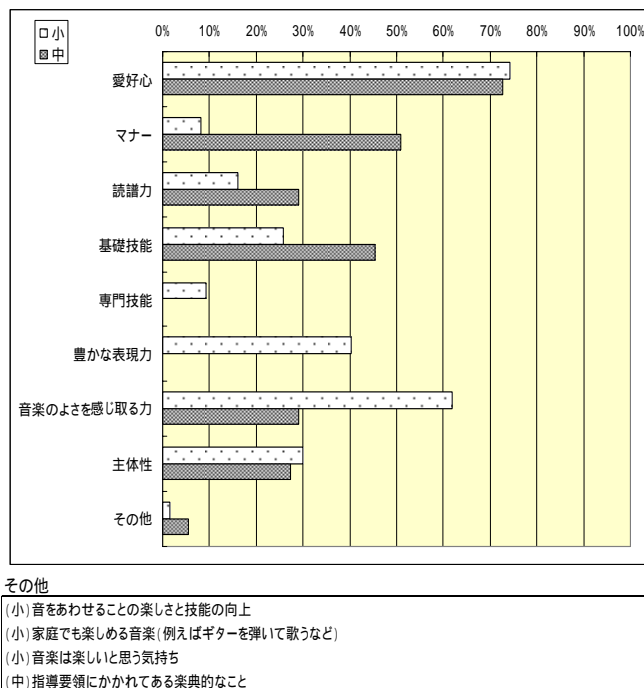


図11 教師：中学校（小学校）で育てて欲しいこと

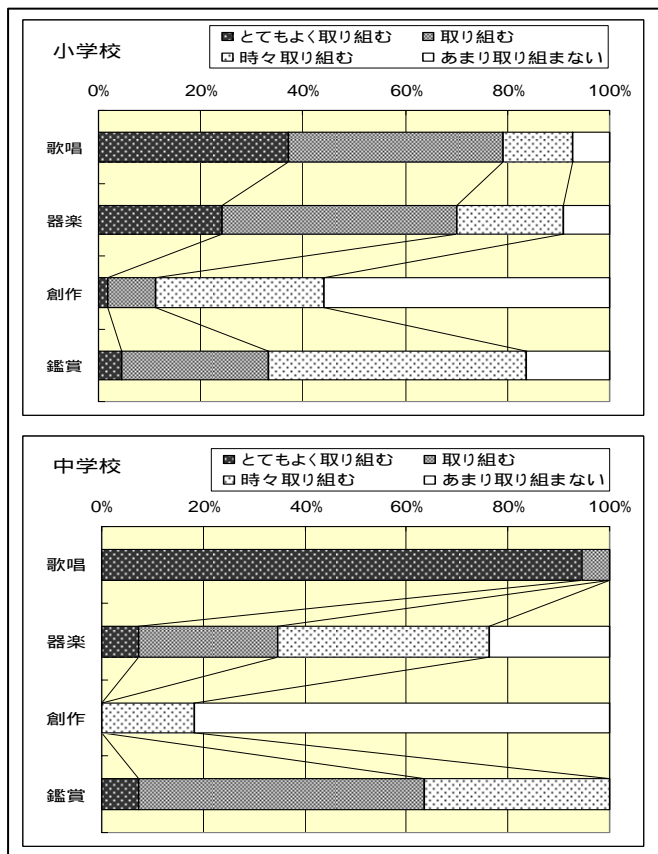


図12 教師：領域の取組

## 子どもたちと歌唱

小学校では多種の楽器による合奏の授業を多く取り入れているのに対して、中学校では合唱が中心の授業であり、小学校ほどの合奏を行うことはほとんどない。では、中学生はこのことをどう感じているのであろうか。

右図は、授業の中で一番好きな活動を調査した結果である（図 13）。他学年に比べて小6では歌唱領域を好きだと答えている子どもの割合が最も少なく、器楽領域が好きだと答えている子どもの割合が最も多いことがわかる。

本研究会議では、低学年から積み上げてきた器楽の喜びを感じている子どもたちが多いことが、器楽好きの割合が多くなった理由ではないかと考えた。また、小6ぐらいになると、成長の早い子どもにとっては変声が始まる時期でもあり、声が出しにくくなってくことや思春期に入り周囲の目を気にしだすようになり、これまでのように無邪気に歌えなくなってしまうことが、歌唱好き減少の原因ではないかと考えた。小6の歌唱好き減少と器楽好き増加の原因が、思春期を迎える子どもたちの体と心の発達であるとするならば、ほとんどの子どもたちが思春期となる中学校では、歌唱好きの子どもは小6よりも減少するはずである。しかし、この調査結果によると、小6よりも中1が、中1よりも中3の方が歌唱好きが増加していた。これは子どもたちにとって、変声期や思春期による心の変化が、単純に歌唱離れの原因となっていないことを意味していると考えられる。

## 教師と子どもたちとのズレ

子どもたちは変声期に声のコントロールが困難になると、歌うことに対する自信が揺らいでいく。音程がはずれたり嘔声になったりと、思い通りの表現ができないもどかしさと合わせて、周囲から笑われるのではないかという恐れより、自信をもって歌うことができない状況になる。しかし、その状況においても子どもたちは自信をもって歌えるようになりたいと望んでいるのである（図 14）。関連して注目したいのは、「歌上達」「楽器演奏」における小学校教師の予想と子どもたちの気持ちのズレである。小学校教師は、「子どもたちは声が出にくい部分もあるので、歌うことより合奏を好んでいる。」と思っているが、子どもたちはどちらも同じように上達したいと望んでいる。中学校教師は、熱心に歌唱領域に取り組むあまり、少々思い込みが強くなっている傾向が見られる。小・中学校教師が、共に思い込みを捨て、改めて目の前にいる子どもたちの気持ちを確認する必要があると思われる。

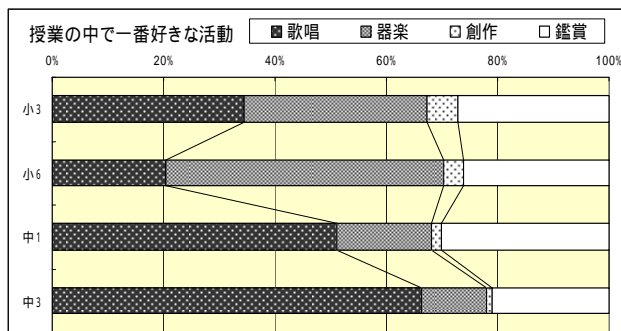
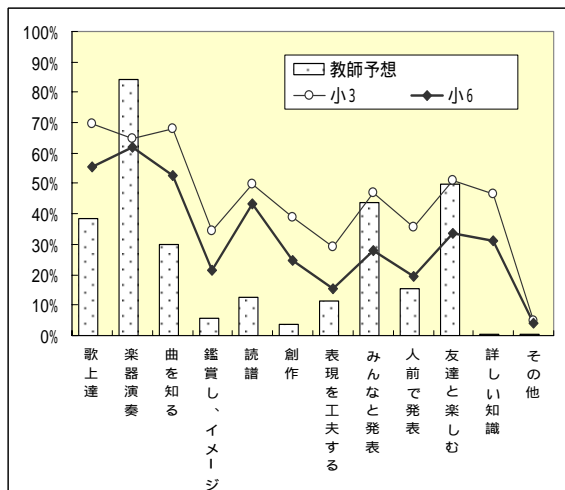


図 13 子ども：一番好きな活動

できるようになりたいこと：小学校比較



できるようになりたいこと：中学校比較

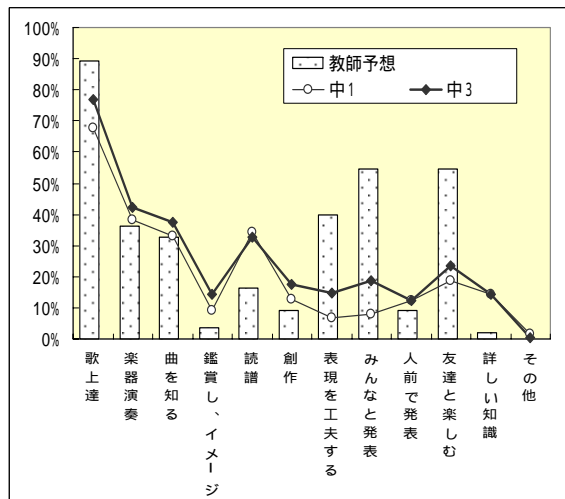


図 14 できるようになりたいこと

教師の熱意が子どもたちに伝わっている

変声期や思春期による心の変化にもかかわらず、小6の器楽好きや中学生の歌唱好きの割合が高かったのはなぜだろう。本研究会議では、これまでの意識調査の結果から考えて、子どもたちは教師が熱意をもって指導した内容を好きになるのではないかという結論を導き出した。右図は子どもが一番好きな領域と教師の予想を比較したグラフである(図15)。この調査の時点で教師が子どもたちの好きな領域を予想できるということは、既に授業においてこの予想を反映した実践が行われていた可能性が高い。そこで、予想の高い領域が、既に実践されていると考え、小学校での器楽や中学校での歌唱というように、教師が熱意をもって指導している内容に興味や好意を持っているという結果となっている。教師が思う以上に、子どもたちは授業

における教師の熱意を感じ取っているのである。授業内容に対する子どもたちの興味・関心は、本来子どもたち自身も持っている好き嫌いの感覚だけで決定しているのではなく、教師の授業に対する熱意によって大きく影響されるのではないかと考えた。そこで、小学校の教師が「子どもたちは器楽を求めている。」と考えて、高学年で集中して器楽に取り組むことにより、器楽好きの子どもたちが増え、また、中学校の教師が熱意をもって歌唱指導を行えば、歌唱好きの子どもたちが増えていくものと考えられる。今回の意識調査の結果から明らかとなったことを考えると、小・中の子どもたちの意識の違いは、成長段階の違いにも多少の原因があると思われるが、そのことよりも教師の授業に対する姿勢が大きいことがわかった。そうであれば、我々教師の責任は重く、思い込みではなく、しっかりと子どもたち自身と向き合って授業を行っていかねばならないと感じた。

### (3) 授業実践

「より感動のある授業」とは

「より感動のある授業をめざして」は、本研究のサブテーマであるが、「感動」という言葉自体が抽象的であるため、具体的に授業のどのような場面で「感動」が起こるのかわかりにくい。そこで、本研究会議では、授業実践の前に「感動が起こる授業」を定義することにした。安易な実践から、感動は期待できず、しっかりとしたねらいに基づいた実践が、感動のある授業の基となる。音楽の感動は音楽が存在するところに生まれ、感動するのは一人一人の「本心」である。ここでいう「本心」とは心の奥底にもっている本音の気持ちのことであり、ねらいのはっきりしない中途半端な学習活動では子どもたちは満足せず、音楽を「本心」で感じ取ろうとしない。感動は夢中で音楽に取り組むことによって「本心」が目覚め、今まで気づいていなかったものが、「新たな気づき」によってよいものへと価値づけされたときに起こるのではないかと考えた。したがって、本研究会議の考える「より感動のある授業」とは次の通りである。

子どもたちが夢中で音楽に取り組む中で、音楽の諸要素や全体の響き・作品の背景・仲間との一体感や自分自身の存在価値などの「新たな気づき」によって、今まで気づかなかったものがよりよいものへと価値づけされるプロセスを子どもたち一人一人がより多く体験する授業。

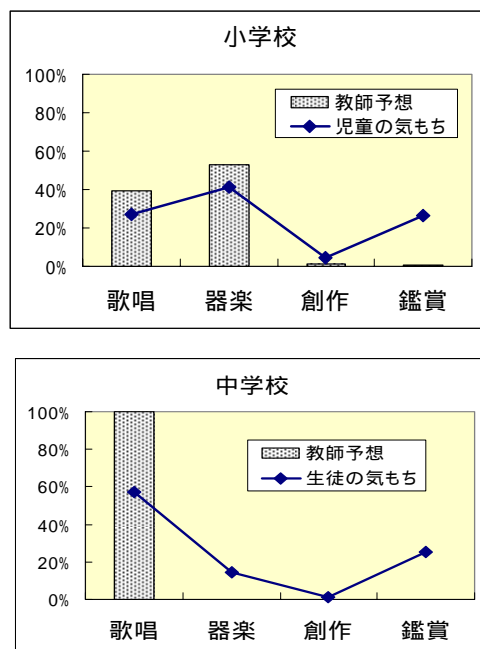


図15 好きな領域

そして、この「より感動のある授業」を実現させるために、夢中で音楽に取り組むために必要な技能と、新たな気づきを生み出す感受の両方が必要であると考え、小学校教師と中学校教師で互いの授業スタイルを取り入れながら授業実践に取り組むことにした。

#### 授業実践でのねらい

研究会議での話し合いや意識調査の結果からは、小学校と中学校の歌唱における授業スタイルに違いがあることがわかった。簡単にまとめると次のようになる。

	小学校の傾向	中学校の傾向
教室環境	机あり。他教科の授業と同じ	机なし。イスのみ。パート別に座る
発声	必要に応じて。無理はさせない	毎回継続して行う発声練習がある
課題	子ども自身が見つかる	教師から提示することが多い
歌詞の扱い	詩の内容を味わうことに意識を置く	発音など表現に意識を置く
その他	考える時間を大事にする	表現する時間を大事にする

小学校の授業スタイルは、技能よりも感受に重点が置かれ、一方、中学校では感受よりも技能に重点が置かれていた。「より感動のある授業」を行うためには、技能と感受の両方がなくてはならない。そこで、それぞれの授業で小学校では感じたものを確実に表現するための技能を、中学校ではより豊かな表現を行うための感受を重視した授業を行うことにした。その際、小学校でよく行われている主体的に考えることを大切にされた指導や中学校での発声練習などの技能指導を、研究会議の中で情報を交換し合い、その情報を授業に取り入れた。

#### 小学校の実践（5年生）「曲想を感じ取ってひびき合う声をつくろう」

意識調査の結果でも明らかとなったが、小学校教師の9割が音楽を専門としていない。したがって、具体的な技能の指導で悩んでいる小学校教師もいるはずである。本研究会議の研修員も、高い声の指導で悩んでいた一人である。子どもたちも意欲はあるが、工夫したり考えたりしながら見つけていくだけではなかなか表現したい高い声にならないと悩んでいた。また、突然「正しい発声で」と子どもたちに取り組みさせてもかえって歌嫌いにさせてしまうのではないかと悩んでいた。そこで、中学校教師と小学校教師が共同で案を出し合い、小学生が楽しみながら発声練習を行う方法を取り入れた授業を実践することにした。

～ 振り返り用紙より～

- 0星人になってたかい声ができるようになった。(女)
- 0星人になったとき、わらってしまった。けどちゃんとできた。(男)
- 低い声や高い声が出せるようになってとてもうれしくて、とても歌が好きになった。(男)
- 0星人をやっていた時、ほんとうに0の口になっていました。(女)
- 0星人でたかい声ができました。(女)
- いっしょうけんめいやると音楽が楽しくなると思いました。(男)

- T: (自分たちの歌を聞いた後で)さっきのみんなの声はどうだったかな？
- C: 高い声をもっときれいにしたい。
- T: 高い声をきれいな声で歌うにはどうしたらいいのかな。みんなは、高いとび箱を跳ぶときは、どんなことに気をつけるかな？低いときと同じようにして、ただ走って行って、跳べるかな？
- C: 跳べない。
- T: そうだね。走るスピードとか、ジャンプの強さとか、手をつく位置とか、跳び越えるタイミングとか、いろいろ工夫するよね。それで飛べるようになるんだよね。声の出し方も同じなんだよ。きれいな声の出し方ってあるんだって。それでね、全然難しくなくて簡単に上手になれる練習があるのでやってみましょう。
- 遠い宇宙のかなたにはね、「0星人」といってすべての言葉を「Oh～」で会話する宇宙人がいるそうです。その0星語をマスターすればいい声になれるんだって。みんな0星人できるかな？
- C: Oh～！
- T: わぁ、すごい！それじゃ…今日の給食おいしかったよねえ。
- C: Oh～！
- T: では、これから隣の人と今日の給食について0星語で話しましょう。

まず、子どもたちがどのような声になりたいか、理想とする声をつかませるために、目標となるような演奏をたくさん聴かせた。曲により表現の仕方や歌い方が違うこと、そして、二部や三部の重なり的美しさなどを感覚的にとらえることができた。このような体験を通して、自分たちの歌声を振り返り、理想に近づけるためには何が必要か、どうしたらよいかを考えさせた。「高いところがきれいにならない」「どならないで歌いたい」「言葉を大切にしたい」などの意見が子どもたちから出された。

ここで大事なことは、子どもたちの考えや感じたものを、具体的な手だてへと導くために音楽の諸要素に結びつけ、音楽の質の高まり（表現の技能）となるような教師の指導や支援である。これが子どもの学びを高める基になると考える。このように子どもから出された気づきや思いなどの一つ一つに対して、適切な指導や支援を行うことにより、主体的な学びを通じた基礎・基本の確実な定着がなされていくと考える。

また、高学年になるに従い、表現の意欲がなくなると思われがちだが、今回の授業実践を通して、クラスの雰囲気づくりや教師の言葉かけなどによって改善されることがわかった。子どもたちは曲想に合った発声があることを知り、互いの声を聴き合い認め合うことで、自分の歌声に自信をもつようになり、その後行われた学習発表会において、例年を遙かに上回る数の子どもたちが合唱での参加を希望してきたのである。

中学校の実践（2年生）「歌詞を味わい表情豊かに表現しよう」

中学校の場合、合唱の取組が盛んに行われている。「発声練習」「パート練習」「全体練習」が大きな柱となって1時間の授業が進んでいく。授業時数が少ないこともあるため、なかなか歌詞をまるごと味わうところまでたどり着かないことが多い。しかし、ただ歌うだけでは音楽の本質に迫ることはできない。歌詞による新たな気づきを見つけ、子どもたち自身が音楽をより深く味わうことが必要であると考え、小学校で取り入れている歌詞の味わい方を中学校の授業で取り入れることにした。

T:これからCOSMOSの演奏を聴きます。聴きながら歌詞の中で自分が「いいなあ。」とか「すてきなあ。」など心に感じる部分に丸をつけてみてください。(COSMOSの演奏をCDで聴く。)

T:どうでしたか。Aさんはどこがすてきだと思ったかな。

S:百億年。

T:そう。他の人はどうかな。では、これから私が歌詞を呼んでいきますので、みんなが丸をつけてくれた「いいなあ。」と思ったところになったら手を挙げてください。

(教師が前面に掲示してあるCOSMOSの縦書きの歌詞をなぞりながら朗読し、生徒はそれぞれの歌詞の所で挙手。)

～振り返り用紙より～

なんとか考えたのも微妙で、もっと深いものがあるのではないかと、また考えてしまいました。(女) 百億年のところと君も星だよというところはきれいに気持ちを込めて歌いたい。(女) アルトの音程をとるのがとても難しかった。でも、COSMOSはとってもいい歌詞がたくさんあるから頑張って伝えられたと思う。気持ちを込めて歌っていきたい。(女) 一つ一つの歌詞に気持ちを込めて声の響きとかを大切にしたい。(男) 練習記号A～Dではやっぱり百億年が意味が深いと思うから、それを伝えられるようにしたいです。(男) 歌詞の重さを表すにはどうしたらいいのだろう？次回までに自分なりに考えておきたい。(男) 今回は歌詞をととても意識して歌ったので、とても心がこもっていました。(女) 歌詞の意味を教えてもらって、もっとCOSMOSの深み！？を感じながら歌えました。(女)

中学生は一般的な傾向として、他人の目が気になり素直に自分を表現することをあまり好まない。中学校の教師は専門性が高いが故に、技能の習得を中心に授業を行いがちである。その中で生徒は、「できる・できない」「上手・下手」という見方で他者とのかわりをもつようになっていると思われる

る。他人の目を非常に気にする時期でもあり、一層自分を表現しようとしなくなっているのではないだろうか。

今回の歌詞の味わいを豊かな表現に生かす活動は、単なる技能を習得して上達する場合に比べ、生徒の主体的な学びの姿が現れ、自分の気づきや思いを大切にすることで、「できる・できない」「上手・下手」という判断に縛られることなく、安心して自分の気づきや思いを表現しようとする。自分の気持ちと向き合い、他者の様々な気持ちを受け入れようとするにもつながる。他者に触発され、新たな気づきにつながったり、自分と同じ思いを他者と共有したりすることができる。このような感じ取り（感受）を大切にすることにより、深く音楽にかかわり、自分の思いを実現させようと主体的に表現活動をしていこうとする姿が現れる。そして、自分の表現に近づけようとするために技能を高めようと努力するのである。

教師が歌詞を朗読する中で、自分の感じ取った場所を知らせるために挙手するとき、子どもたちは興味深く周囲の子どもたちの様子を感じ取ろうとしていた。この活動を通して子どもたちは、歌詞を学級全体で共有して味わっていた。その後パート練習が行われ、子どもたちは歌詞を大事に表現しようとする練習を始めたが、その日の練習は音取りの難しさや、高音の発声に費やされることになった。

結局、最終的には本物の音楽の感動を味わうには、技能の習得は欠かせないと考えられるが、子どもたちが曲に対する理解と思いがあるのとないのとは、学びに大きな違いが生まれてくることが見えてきた。

## 研究のまとめと今後の課題

研究を通して見えてきたことは、それぞれのよさがあるということである。小学校のよさは、子どもたちが気持ちや考えを大切にした主体的な学びを展開していく点であり、中学校のよさは、教師の専門性を生かし、高い表現力を身につけるための授業を展開している点である。

今回、本研究会議がめざした「より感動のある授業」とは、感受と技能が結びついた学びを実現させていくことである。作者の思いや音楽の美しさを素直に感じ取るなど、一人一人の豊かな感受を通すことによって、自分から積極的に音楽にかかわろうとする心が育つのである。これらの感じ取りは、表現の技能を身につけたいという意欲を引き出してくれ、この一連の流れの中で子どもたちは音楽とのかかわり方や学び方を学んでいく。学び方を学ぶということは、短い時間の中でも学びの質を高めることになる。

感受と技能が結びついた授業を行うためには、教師が的確な指導を行う必要があり、その指導は必ず音楽に立ち返ったものでなければならない。そうした指導を行うところに教師の存在価値があると考えられる。現在、課題となっている授業時数の縮減についても、技能と感受が結びついた授業によって対応することができるのではないだろうか。そのためには教師が意識改革を行い、小学校のもつよさと中学校のもつよさを教師同士が互いに吸収し合っていく必要がある。

現在の状況として、ほとんどの中学校教師は、小学校で子どもたちがどんな学習を行ってきたのかを十分把握しないまま授業を行っている。中学校教師が小学校の学習内容や学習方法を十分に把握していることによって、子どもの意欲をさらに高める問いかけや音楽活動を展開することが可能になる。一方、小学校教師も現在指導している学習内容が中学校のどの内容と関連しているのか、その関連性を把握していれば、学習の扱い方が違ってくるはずである。また、音楽室でのマナーや発声・楽器の扱いなど中学校と連絡を取り合うことができるのであれば、小・中学校を通して一貫した指導をする

ことができ、子どもたちがスムーズに音楽を学ぶことになる。

そのためには互いに実際に顔を合わせて話し合い、授業を見せ合い、互いの考えを遠慮なく出し合っていくような教師間の交流が必要となる。また可能であれば、それぞれがどんな内容を学習しているのかを理解するためにも、互いの年間指導計画書の交換も必要ではないかと考える。

現在はほとんど交流していない状況であることを考えると、一般的に実施されるまでには様々な困難が予想される。しかし、本研究会議内で授業を行った教師の感想などから、あえて取り組んだりの手応えは感じられる。今後、子どもたちの成長という一本の線上に小・中学校の授業を置き、9年間を見通した授業が実現できることを願っている。この研究をきっかけとし、互いを知ることから始めることができると強く願うものである。

今後の課題としては、中学校区における「情報交換」「授業交流の実施」「長期休業を利用した合同の研修の実施」など、具体的な取組の工夫が挙げられる。

年間指導計画などの学習内容を記載した文書のやり取りを始めとして、授業スタイルや子どもたちの学習への取組状況などを情報交換することにより、それぞれの授業内容を見直すことが可能となり、今よりも充実した授業内容にしていくことができると考えられる。また機会があれば、実際にどのように授業を行っているのか授業参観や教師の交換授業などを行うことによって、より深い理解が可能となるはずである。落ち着いて話し合いが深められる長期休業を利用し「合同研修」が実施されると、さらに具体的な内容まで話を進めることが可能となる。いずれにしても、単発で終わらせることなく、無理のない所から継続していくことを願うものである。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言をくださいました講師の先生方、また、校長先生を始め学校教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

#### 【参考文献】

小原光一 山本文茂『音楽教育論』教育芸術社	1997年
金本正武『音楽科授業論』東洋館出版社	1998年
文部省『中学校学習指導要領 解説 音楽編』教育芸術社	1999年
金本正武・小原光一『音楽科の授業をどう創るか』明治図書	1999年
文部科学省『小学校学習指導要領 解説 音楽編』教育芸術社	2004年
キース・スワニック『音楽の教え方』音楽之友社	2004年
川池聡「音楽科教育をどのように進めればよいか」音楽鑑賞教育4～12月号	2005年
相模原市総合学習センター「平成17年度 研究収録201集」	2005年
初等科音楽教育研究会『改訂新版 初等科音楽教育法』音楽之友社	2005年
中等科音楽教育研究会『改訂新版 中等科音楽教育法』音楽之友社	2005年

#### 【指導助言者】

千葉大学教育学部教授	金本 正武
川崎市立小学校音楽教育研究会長（川崎市立末長小学校長）	山下 進
川崎市立中学校教育研究会音楽科部会長（川崎市立王禅寺中学校長）	森 美加子
川崎市総合教育センター指導主事	金子やちよ